様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ９ 月 １０ 日現在

機関番号：１３２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３５００４１

研究課題名（和文）出生意欲につながる「規範意識」の形成過程に関する研究

研究課題名（英文）Determinants of childbearing motivation for Japanese married women

研究代表者
中村　真由美（Nakamura, Mayumi）

富山大学・経済学部・准教授

研究者番号：３０４０１２６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では「出生意欲（希望する子供の数）」に着目し、その規定要因と形成過程を明らかにするためＷＥＢ調査（25～35歳、子供数0～1人の既婚女性2000人）を実施した。結果としては、「父や母が子育てを楽しんでいた」、「愛情深かった」と感じている者は自身も出生意欲が高く、また「成長過程における年下の子供との接触経験」も有意に出生意欲を高めていた。親が子育てを楽しめる環境や、子供が成長過程で幼い子供と楽しく接触できるような環境を整えることが、大人になってからの出生意欲を高めると考えられる。また、出生意欲は、生死を人間がコントロールすることに対する意識や、伝統主義に対する態度とも関わっていた。

研究成果の概要（英文）：This study investigated the determinants and formation processes of childbearing motivation by conducting an original web survey of 2000 Japanese married women (25 to 35 years old, with one or no child). The results showed that women who reported that their parents had enjoyed childrearing and had been loving toward them while they were children, demonstrated higher childbearing motivation as adults. Additionally, women who had contact with younger children while in their teens, especially when it was enjoyable, showed increased childbearing motivation as adults. Therefore, providing help and support for parents so that they can enjoy childrearing, as well as providing an environment for children where they may have enjoyable experiences being around younger children, may increase one's childbearing motivation as an adult. Further, women's sense of control over life and death and their attitudes toward traditionalism were related with childbearing motivation.

研究分野：ジェンダー

キーワード：出生意欲　社会学　ジェンダー　childbearing motivation　出生　少子化　規範意識

## １．研究開始当初の背景

研究代表者は未婚者研究や専門職のワークライフバランスの研究を通じて、少子化について量的･質的分析に取り組んできた。その中で 2011 年の内閣府「都市と地方における子育て環境に関する調査」に調査委員として参加し、さらに富山県からの受託研究も通じて、全国および富山県の子供のいる有配偶者を対象にインタビューや量的調査を実施する機会に恵まれた。そこで気づいたのは、出生意欲（欲しい子供の数）には規範意識等の意識が大きく関わっているということであった。「子を持つことは自然な流れ」と考える人や「子供がいると家庭が明るくなる」と考える人は欲しい子供の数も多いのである。多くの人は Becker の言うような子育てのコストを熟慮した末の合理的選択を行っている訳ではなかった（もちろん、第二子、第三子の出産選択にはコストが関わってくるケースもあるが）。このことから、出生意欲の規定要因や、意識との関わりについて着目するようになった。

「規範意識等の意識」が「出生意欲」に関わっていることは明らかになったが、日本の既存の調査では「出生意欲」の規定要因や形成過程についての研究は少なく、また、国内外の研究においても、出生意欲が規範意識等の意識（たとえば生死のコントロールの許容に対する意識）とどのように関わっているのかについてはほとんど知られていない。そこで本研究では、出生意欲や関連する意識の形成過程や要因を明らかにすることを目指した。また、出生意欲（子供を持つ、持たないという選択）は、様々な意識項目、例えば、人間が自らの生死のコントロールをしてよいという意識（中絶や安楽死など）や、伝統主義（伝統に従うべきと考えるかどうか）とも関連しているという仮説を立て、これも検証した。

## ２．研究の目的

本研究では、成長ステージ（少年期・青年期・成人期）に着目し、ステージごとの経験（両親、家族関係、学校、子供との接触体験、サポートネットワークなど）がどのように「規範意識（およびその他の意識）」の形成に関わっているのかを明らかにした。また、他の意識項目（個人主義、中絶や安楽死等の「生死」の自己決定に関わる意識）との関連も調べ、出産や子育てに直接かかわる項目以外の社会における意識の変化との関連も明らかにした。

## ３．研究の方法

本研究では、出生意欲の規定要因・形成過程や様々な意識項目との関係を計量的に明らかにする。（１）内閣府の「都市と地方における子育て環境に関する調査」の個票データを再分析した。（２）新たな調査を実施した(無作為抽出したモニターを利用した web 調査)。前述の内閣府データのサンプルは「子供がいる既婚カップル」に限られ、調査項目も限られていることから、新たな調査では「子供のいないカップル」も調査対象に含め、出生に関する意識項目を拡充し、さらにライフステージごとに（青少年期・成人期）意識に影響を与えると考えられる経験について聞いた（親子関係、学校特性、子供との接触経験など）。これらの結果を解析し、出生意欲の規定要因・形成過程と様々な意識（生死に対するコントロールを肯定するかどうか、伝統主義を肯定するかどうか等）との関連を検証した。

## ４．研究成果

（１）まず、内閣府の「都市と地方における子育て環境に関する調査」の個票データ

を再分析した。さらに上記の調査を補完するため、オリジナル調査（富山市と福井市において実施した無作為抽出による郵送調査票調査）の内容もあわせて分析した。その結果、出生に関する規範意識には地域差があり、それが親だけでなく、祖父母からの子育て支援の度合いにも影響していることが明らかに なった。たとえば福井では、子供に対する伝統的な意識が強い（子供を跡継ぎとして見なす等）が、同じような三世帯同居状況にある 富山に比べ、祖父母の子育て支援の度合いが大きかった。また、地域の経済状況（県民ひとりあたりの地方税収入）が住民の地域の経済展望に影響し、さらにはそれが子育てのしやすさや子供を持とうという意欲に影響していることが明らかになった。研究成果は、世界社会学会、日本家族社会学会、および、学会誌（家族社会学研究）において報告している。共著の本（英語にて出版）としても出版予定である。また、家族形成意識に影響する要因として、母乳育児に関する「指導」に着目し、母乳育児についての指導が母乳育児期間や出生間隔に与える影響を検証した（福井市調査データを用いた）。この研究成果を日本社会学会で報告した。

（２）新たな調査を実施した。25～35 歳で、子供数 0~1 人の既婚女性 2000 人を対象とした WEB モニター調査を行い、本人の成長過程や現在の体験（成長過程における子供との接触体験、親子関係等）や、他の意識項目（伝統主義、中絶や安楽死等「生死」の自己決定に関わる意識）と出生意欲との関連を検証した。結果としては、家族関係は出生意欲に有意に影響していた。「父や母が子育てを楽しんでいた」、「愛情深かった」と感じている者は自身も出生意欲が高い。「成長過程における年下の子供との接触経験」も、特にそれが楽しめるものである場合には、有意に出生意欲を高めていた。また、きょうだい数が多い者は、自身も子供を３人以上希望する傾向があった。自身の子供時代に、幼い子供との接触経験があることが、自身が大人になってからの出生意欲を高めると考えられる。また、意識項目では、生死に対する自己決定を肯定する者や、伝統の継続に懐疑的な者は出生意欲が低い傾向があることがわかった。また、結婚したら子供を持つのは当たり前という意識を持つ者は出生意欲が高い。親が子育てを楽しめる環境にすることや、子供が成長過程で幼い子供と接触する機会を設けることが――つまり、幼い子供と一緒に過ごす時間の楽しさを体験することが――、子供が大人になってからの出生意欲を高めると考えられる。また、出生意欲は生死の自己決定に関わる意識や、伝統主義とも結びついている。人間がその生や死を自己コントロールしようとすることを肯定することや、伝統主義に対して懐疑を持つことは悪いことではなく、教育程度の高さとも結びついている。これらの意識を持つことや、出生意欲が低いことを一概に否定するのではなく、子育ての楽しさが子供に伝えられるような、親の子育て環境や、子供の育つ環境を整えることが重要である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１件）

中村真由美．2016.「地域ブロック内における出生率の違い－富山と福井の比較から－」『家族社会学研究』8(1):26-42。

〔学会発表〕（計　５件）

1. Mayumi Nakamura, 2014.7., “Factors for Regional Variation in Japanese Fertility” International Sociological Sociological Association, World Congress of Sociology. （国際学会、査読あり）

2．中村真由美．2014.9．「なぜ富山の第三子出生率は福井より低いのか？ ― 出生率の地域ブロック内格差とその要因 ―」日本家族社会学会大会．（国内学会、査読あり）

3．中村真由美．2015.9．「地域ブロック内における出生率の違い―富山と福井の比較から―」（国内学会、シンポジウム招待講演）．

4．中村真由美．2015.9．「母乳育児と出産間隔」日本社会学会大会（国内学会、査読有）

5．中村真由美．2016.10．「母乳育児期間が第二子出生に与える影響 ―福井市データのイベントヒストリー分析 ”」日本社会学会大会（国内学会、査読有）

〔図書〕（計　1 件）

Mayumi Nakamura. (forthcoming) “One Size Fits All? The Implications of Differences in Regional Fertility for Public Policy” in Gill Steel ed. Beyond the Gender Gap in Japan. Ann Arbor: University of Michigan Press.

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０件）

○取得状況（計　０件）

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

中村真由美（Nakamura, Mayumi）

富山大学・経済学部経済学研究科・准教授

研究者番号：３０４０１２６９